遅れてきた戦士たちの挽歌
――井上靖『氷壁』のホモソーシャル

宮﨑かすみ

――要旨

本稿は、井上靖の小説『氷壁』をホモソーシャルの観点から読み解こうという試みである。この作品は、後にナイロンザイル事件として世間をにぎわすことになった、ナイロンザイル切断による山岳遭難事件と、魚津とかおるのモデルとなる槍ヶ岳北鎌尾根での遭難事件の二つの出来事から着想された。それらの経緯をまとめた上で事実関係を整理し、作品の骨格をなすホモソーシャル構造を明らかにする。小坂と魚津という登山仲間が同じ一人の女を愛するようになるという作品の基本構造をホモソーシャルから解釈して、魚津は、小坂の八代美那子に対する恋愛感情を模倣したものと分析した。さらに、小坂が亡くなった後もこのホモソーシャル関係は、小坂の妹かおるを通して継続していた。しかもそれは、かおるを交えた小坂と魚津のホモソーシャルではなく、前述の美那子と小坂と魚津の三角関係において、かおるが小坂の代理として機能している。かおるが、魚津と美那子の恋愛の成就を妨害していたという分析を通して、相思相愛であったにもかかわらず、魚津が美那子を諦めてかおると結婚することを決意したのは、友人である小坂のためであることを導いた。主人公の魚津は、恋愛の成就よりも、ホモソーシャルを尊重したために亡くなったのである。その意味で、この作品は、戦前からの伝統的なホモソーシャル共同体に捧げられた挽歌であるという解釈を提示した。

はじめに

井上靖の『氷壁』は、一九五六年の十一月から翌五七年の八月まで『朝日新聞』に連載された新聞小説である。これは、一九五五年に起き、日本の山岳会を揺るがした「ナイロンザイル事件」という史実に想を得、また一九四九年一月の新進気鋭の登山家、松濤明と有元克己の槍ヶ岳北鎌尾根における遭難事件もある程度反映させて

つくられた作品である。ただし、実際の事件よりも恋愛の要素を重層的に絡ませた恋愛小説となっており、そのせいか大いに人気を博し、作家井上靖の地歩を固める作品となった。本稿は、この作品をホモソーシャルの観点から分析するものである。本作品は典型的なホモソーシャルの構造を有しているが、この点からの読解の試みはなされていない。だが、武骨で禁欲的な山男たちの山岳小説が恋愛小説に変貌し、大きな人気と普遍性を獲得したのは、ホモソーシャル構造のもつ普遍的な訴求力のゆえであったと考えられる。そのホモソーシャル構造の力は、現在においてもなお色あせておらず、この作品を基にしたテレビドラマは二〇〇三年にも制作されて話題になった。本稿では、大きな二つのホモソーシャル構造を抽出し、そこから作品の本質を抉り出していく。

作品の背景を視野に入れるために、まずは、作品の骨格として利用された二つの事件――「ナイロンザイル事件」と、魚津恭太のモデルとされる松濤明の遭難――の概略を整理しておきたい。

第一章　作品のモデルと二つの遭難事件

一九五五年一月二日、三重県岩稜会に所属する登山家三名のパーティが北アルプス前穂高岳東壁を登頂中に事件は起きた。当時三重大学一年の若山五朗が五十センチほど滑落した際、岩にかけたナイロンザイルが何の抵抗も音もなく切れ、若山は谷底に墜落し、死亡したのである。[1] 彼らがナイロンザイルを使ったのは初めてのことで、切れたナイロンロープは三本撚り、直系八ミリの新品であった。このナイロンザイルは、一トンの重さにも耐えると謳い、十一ミリのマニラ麻ロープに匹敵する強度を持つと保証されていた。

ところが、その数日前、五四年十二月二十八日に明神岳で同様の事故、さらに翌五五年一月三日にも同じ前穂高岳で直径十一ミリのナイロンザイルが切断する事故があり、それぞれ一名ずつの重傷者が出ていたことが明らかとなった。短期間にこれほど事故が頻発したことで、この件は「ナイロンザイル事件」として社会問題化した。死亡した若山の兄であり、岩稜会会長の石岡繁雄はこれを受けて、独自に検証実験を行い、直径八ミリのナイロン製ロープが、鋭角の岩角にかけられ、人間の体重程度の重量で引っ張られると簡単に切断することを突き止めた。

一方、ナイロンザイルのメーカーである東京製綱は、大阪大学工学部教授で日本山岳会関西支部長である篠田軍治を責任者として、ナイロンザイルの公開実験を行った。その際、秘かに九十度の岩角に一ミリ、四十五度の岩角には二ミリの丸みをつけていた。そのインチキな実験の結果、ナイロンザイルは切断されず、岩稜会の事故は操作ミスであったという内容の記事が日本山岳会や化学学界で報じられた。

これに対して、岩稜会は、一九五六年、篠田を名誉棄損で告訴し、また石岡の実験結果にもとづく彼らの主張を自作の冊子『ナイロンザイル事件』にまとめて、関係方面に郵送し、ナイロンザイルの安全性に対する問題を訴え続けた。この冊子を三笠書房の編集者、安川茂雄を介して入手した井上靖は、石岡や事故現場にいたメンバーに取材し、この事件をもとに構想した小説、『氷壁』を書きあげた。

本作が『朝日新聞』に連載されたのは先述した通りある。井上は、男だけの世界で起きた遭難事故とナイロンザイル事件に、男女の恋愛の情を取り込み恋愛小説の体裁にしたことで、新聞読者の熱い支持を得て大変な人気となった。しかし、情報提供をした石岡にとっては満足のゆく展開ではなく、「もっとメーカー側の社会を欺く姿勢を追及するものにしてほしい」と、井上に手紙を書いたという。[2] しかし井上は、「あくまでも小説であり、勧善懲悪を目的としたものでないことを分かってほしい」と伝えてきた。

一方、作品の最期で、岩石の崩落を受けて遭難死する主人公、そして帰らぬ想い人を待ち続けるも、待ちかねて自ら捜索のため山に入るというエピソードのモデルとなったのは、先述した松濤明と有元克己の遭難である。こちらは男性二人という点で、魚津と小坂の関係を思わせるが、三角関係の要素は皆無であるし、山を下りる松濤を待ちかねていた芳田美枝子は、婚約者などではなく、ただ働いていた山の宿泊施設で客として滞在した松濤と数日一緒に過ごし、懇意になったというだけの関係であった。そうは言っても二人の間には淡い恋愛感情が芽生えていたのは芳田本人が認めている。[3] 松濤は、槍ヶ岳北鎌尾根の縦走を終えてから、乗鞍岳でスキーに明け暮れていた芳田と合流するかもしれない、と書いたメモを残していた。松濤は、芳田のために東京の名店でスキー靴を誂えさせ、それを彼女に持ってきたのだった。松濤パーティが挑戦している稜線を眺めながらスキーをしていた芳田は、少しでも早く会いたくて、彼らが下山する予定の地にまで山を越えて行った。しかし待てど暮らせど松濤らとは会えないまま日が経ち、松濤らはそのまま東京に戻ったものと思っていた。二月になってから、松濤の消息を尋ねる手紙を受け取った芳田は、初めて遭難に思い至ったのであった。

この芳田美枝子は、女性ながら日本山岳会に所属する登山家であり、国体にも参加したことのあるスキーの名手であった。子供の頃から山歩きをこよなく愛していた彼女は、美少女ながらもボーイッシュなイメージがあり、作者の井上が彼女を参考にしてかおるの人物像を作り上げたのは想像に難くない。だがそれよりも、松濤明が魚津のモデルであると確信させるのは、遭難した松濤が遺した手記である。死を覚悟した一月六日付の手帳には以下のように記されていた。

1月6日　フーセツ
全身硬ッテ力ナシ、何トカ湯俣迄ト思フモ有元ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決ス
オカアサン
アナタノヤサシサニ　タダカンシヤ、一アシ先ニオトウサンノ所ヘ行キマス。
何ノコーヨウモ出来ズ死ヌミヲオユルシ下サイ。[4]
（中略）
我々ガ死ンデ　死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入リ、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身体ヲ作ル
個人ハカリノ姿　グルグルマワル[5]

死にゆく自らの運命を潔く受け入れ、透徹した自我を保ちながら、

毅然と書き記した言葉には凄味がある。自死したマラソンランナー、円谷幸吉の遺書[6]とも並び称されるレベルの遺書である。この遺書が、『氷壁』の魚津の最期の手記の範となっているのは明らかであろう。

ガス全クナク、月光コウコウ、二時十五分ナリ。
苦痛全クナク、寒気ヲ感ゼズ。
静カナリ。限リナク静カナリ。[7]

こうしてみると、松濤明が遺した言葉のリアルな迫力と切実さが放つ力は、作家の文章さえも凌駕している。かおるのモデルとされた芳田美枝子も、設定には細部の相違が無数にあれども、魚津の手記をもって、松濤明が魚津のモデルであると確信している。[8]

これら二つの出来事を元にして『氷壁』は構想された。相互には無関係な事件の二つともに関わり、これらを井上に伝えたのは、三笠書房の編集者で登山家でもあった安川茂雄である。松濤が下山してから乗鞍に寄るのを待っていた芳田は、待ちかねて松濤を少しでも早く迎えるつもりで上高地まで行った。冬季間開業していた上高地帝国ホテルの冬期小屋に辿り着いてみると、当時早稲田大学の学生であった安川がたまたま滞在していた。芳田はその場に居合わせた安川に、「松濤さんに会いませんでしたか」と問い合わせたのだった。厳冬期にたった一人でアルプスを越えてきた少女に安川は驚き、強く心に留めた。この日は奇しくも、松濤らが遭難死した一月六日であった。『氷壁』のモデルが松濤と芳田であることを連載中から彼女に伝えていたのは、この安川であった。彼が井上靖に、松濤をひそかに慕い、山を越えて松濤を追ってやってきた少女の存在を伝えたに違いない。後にナイロンザイル事件が起きたときも、岳人である安川は石岡らが発行した手作りの冊子を送られ入手していた。安川がそれを井上に渡したことがきっかけとなり、井上は本格的に取材を始めたのである。二つの無関係な遭難事件を繋ぐ糸の中心にいたのは安川茂雄であった。

作品の背景となった実在の人物らの経緯と顛末を確認したところで、以下では、この作品をホモソーシャルの観点から分析してゆきたい。井上が現実の人間関係からいかなる脚色を施して、入念なホモソーシャル構造を作品につくり込んだかが明らかになるだろう。

第二章　ホモソーシャルの三角関係と八代美那子

本章では、八代美那子をめぐる、魚津と小坂の関係性を考察するが、その前に『氷壁』のあらすじを概観する。

新進の青年登山家、魚津恭太は、親友の小坂乙彦を登山のパートナーとしている。山から東京に戻ってきた魚津は、小坂に会おうと街に繰り出した。ところがそこで小坂が一方的に想いを募らせる八代美那子に別れを突き付けられる所に遭遇する。女性には縁のない魚津であったが、美貌の美那子から小坂に自分との別離を促すよう依頼されることをきっかけに、彼女を秘かに慕うようになる。

そんな中、二人は厳冬の穂高岳、前穂の東壁に挑むが、絶壁を登頂中に小坂の身体を支えるザイルが切れて滑落死した。この事故をきっかけに、小坂の自殺を疑う美那子は魚津にしばしば面会を求め

接触の機会が多くなることで、二人は互いへの想いを募らせてゆく。彼らが初めて採用したナイロンザイルに保証されていた強度が不足していたために、岩角に掛けた際に切れたことが事故の原因だとする魚津の主張が新聞に掲載された。この内容に、ザイルの製造会社だけでなく、そこと資本関係のある魚津の会社の社長も気を悪くしたため、魚津の上司、常盤の提案でザイルの性能試験を実施することになった。奇しくもその試験を担当するのは、ザイルの素材となったナイロン・メーカー会社の幹部である美那子の夫であった。東京大学で工学博士号を取得した優秀なエンジニアである八代教之助が担当した再現実験において、ザイルは切れなかった。そのため、自分一人が助かりたくてザイルを切ったのではないかという疑いをかけられ、魚津は窮地に陥る。

夏になり小坂の遺体が発見されると、身体に巻き付いていたザイルの断面が科学的に分析された。その結果、魚津への疑念は晴れ、自然に切れたことが証明された。小坂の葬儀の夜、小坂の妹かおるが魚津に求婚する。美那子への思いを募らせていた魚津であったが、美那子にその思いと共に別れをも同時に告げて、かおるとの結婚を決意する。結婚を前に、魚津はもう一度穂高の難所の登頂を試みる。その成功を結婚の条件として自分自身に課したのであるが、落石に遭って落命する。山で待ち合わせていたかおるは、下山してこない魚津を心配して尾根を越え、魚津を迎えに行く。しかし捜索に行った学生から魚津の死を知らされ、遺品のノートを受け取る。かおるは、いつか穂高に登り、ケルンに兄と魚津のピッケルを刺してこようと決意するのだった。

これが全体のあらすじであるが、美那子をめぐる小坂と魚津の三角関係について考察したい。そのためにはまず、ホモソーシャルについて簡単に整理しておく必要があろう[9]。ホモソーシャルとは、英文学の泰斗、イヴ・コゾフスキィ・セジウィックが提唱した概念であり、家父長制社会を支える男性間の絆を指す。セジウィックは、そのモデルをシェイクスピアに始まり十九世紀に至る英文学作品の分析から抽出したが、発想を文化人類学の知見にも依拠していることからして、家父長制社会が成立した原始時代にまでその淵源を遡ることができる。高度に文明化された社会においては典型的なパターンがそれほど頻繁には見られないにせよ、今なお、人々の意識に刷り込まれている。表現された作品としては、少年向けのテレビドラマや大衆向けの娯楽作品に多く見られるし、芸術的な作品ではより洗練された形で現れる。

この概念による分析が生きるのは、男性同士の関係性そのものよりも、そこに女性が介在する場合である。文化人類学者のレヴィ・ストロースは、未開民族の家父長制社会において、花嫁は男性集団から別の集団への贈与物として機能していると看破した。そしてそれは、二つのグループの男性間の絆を深めるためになされるのであることも強調されている。さらにルネ・ジラールは、三角関係の恋愛において、同じ女性を欲望する男性ライバル間の絆こそがその三角関係の要因であるとする[10]。友人同士の二人が同じ女性を欲望するという現象が頻繁に起こることを心理的に分析すると、ライバルである友人の欲望の模倣が生じるからであって、女性の魅力によるのではない。その女性が、もう一人の男性にとっても特別な存在とな

るのは、あくまでも自分にとって無二の友であり、自分にも匹敵する友人が欲望しているからである。自分が一目置く、自分にとって分身ともなりうる友人が思い焦がれる女性であるからこそ、気になる存在となる。つまりこの三角関係において最も重要なのは、ライバルである男性二人の関係性なのである。

他方、二人の男たちが競い合って求める女性は、彼らにとっては「対象」であり、「他者」にすぎない。争いの結果、ライバルを蹴落とした男性は女性を手に入れてしまうと、その女性への関心を失う。女性はあくまでも対象にすぎないからである。セジウィックは先行するこうした知見を洗練させて、家父長制社会を支える男性間の絆をホモソーシャルと名付けた。男たちは、家長として家庭を治め、妻の夫、子供たちの父親としての役割を果たしつつ、同時にホモソーシャルの絆を通して、外部の社会にもつながっている。しかし女性には、近代までそのような絆はなく、家庭という檻に閉じ込められるだけだった。ホモソーシャルは、女性蔑視と女性嫌悪を根底に持つが、この視点による分析は、根深い女性への差別・嫌悪のはびこる理由にも光を当てる。

ホモソーシャルの観点から見ると、魚津が小坂の想い人である美那子に惹かれた理由がよくわかる。美那子は美しく魅力的な女性であるが、なぜ小坂だけでなく、魚津までもがその魅力の俘囚(とりこ)になるのか、作品ではほとんど説明されていないし、魚津が美那子に惹かれる心理にも言葉が与えられていない。魚津が美那子と初めて会ったときのことは以下のように記されている。

> 魚津は相手の眼がちらっと自分に当てられた時、初めてわれに返った気持だった。相手の女性がこの店へはいって来た時から、この席へやって来て、いま自分の方へ頭を下げるまで、魚津は相手からずっと視線を外さないでいた。視線を外さないというより外すことができなかったといった方がいい。しかし、魚津はそうした自分に気づいても、その不作法を恥じる気持はなかった。こうしたことにはすぐ照れるはずの魚津にしたらふしぎな現象であった。魚津は自分の視線が無抵抗に相手に吸い寄せられたのだといった、そんな自然なものを感じていた。(一章・傍点引用者)

魚津が美那子に惹かれたのは、「自然な」ことだと言い、それ以上踏み込んだ説明はしていない。そして作者は、魚津が美那子に惹かれるのは、小坂を意識してのことではないことを確認している。魚津は、小坂が美那子を「奥さん」と呼ぶのを聞いて初めて人妻であることを知り、少々落胆した。ところが、「その落胆の気持ちの中に小坂という親しい友人の立場が全く無視されていることに気付くと、おれはどうかしているなと思った」(一章)。美那子に惹かれる魚津に、小坂の想い人を奪ってやろうとか、小坂に対する競争心などはない、としている。それでいながら、初対面の美那子に眼が奪われ、所謂一目惚れしたことの心理は全く説明されず、ただ「自然な」の一言で片づけられている。魚津は、友人を出し抜くことを目的としたライバル心から彼女に惹かれたのではない。そうではなく、魚津は彼女に「自然に」惹かれた、とされる。しかし、作者が「自然」

を盾にして、心理分析を拒めば拒むほど、逆に、魚津が美那子に惹かれるのは、親友の想い人であるからに他ならない、という「欲望の三角形」構造が深層心理にはびこる根深さが浮上する。他者の欲望の模倣という構造は、「自然」と見なされうるほどに、馴化されている、ということだ。ここで、親友の恋人ないしは妻に横恋慕して奪う恋愛感情を、このように「自然」として表現した例として、夏目漱石の『門』を想起することもできる。漱石もここにおいて、「大風にさらわれた」といった表現以外に、分析も説明も与えていない。[11] ホモソーシャル、もしくは欲望の三角関係理論という分析概念がなければ、言語で分節化することも困難な、自然とも見まがうほどに馴化された心理であったと理解できるのである。三角関係の欲望を美那子に惹かれてから、「小坂という親しい友人の立場が全く無視されていることに気付」いた、と認識する魚津は、小坂との友情を傷つけまいとして、自分に対して、というより読者に対して嘘をついたのである。

さらに、離婚して自分と一緒になってくれと迫る小坂にはっきりと拒絶できない美那子が、魚津から意見をしてくれないかと依頼してくる。すでに美那子に惹かれている魚津にとって、こんなにうれしい役どころはないだろう。小坂に対する優越感をたっぷりと味わえる。

「もちろん、わたし、何回も何回も自分の気持ちをお伝えしてあります。でも、どうしても—」

「それが、小坂には判らんのですか」

「はあ」

「それは、いかんですな、小坂のやつ」（一章）

ここですっかりいい気分になった魚津であるが、その後美那子から小坂との関係の真実を打ち明けられる。つまり身体の関係を持ったと。当然のことながら、「八代美那子の告白は魚津にとっても一つの衝撃であった。聞くべからざることを聞いてしまった気持ちであった」。ここで魚津は小坂に対して強烈な嫉妬心を抱いたはずである。そして魚津は、小坂を模倣して、彼自身も美那子を欲望し始める。ここにおいて欲望の三角形が発動したのである。

魚津はいそいそと小坂に会いに行き、美那子からの言伝を伝える。美那子の行動も、魚津への伝言の内容も、小坂の想定内のことであり、小坂はまったく取り合わない。小坂の美那子への想いの強さ、一途さは、論理や道理を超えてしまっている。小坂は美那子のことを、「あの人となんの関係もなくなった自分はちょっと考えられない。生きて行かれなくなるんじゃないかな」（一章）とまで言う。美那子との別れが宿命づけられていた小坂には、死の気配がすでに影を落としている。

一方的な想いだけでここまで言うのは尋常ではない。小坂は、美那子その人ではなく、美那子という観念の俘囚になってしまったのである。小坂を美那子から引き離そうとする魚津に対して、お前はどちらの味方なのかと詰問する。小坂を八代夫人からできるならば引き離したいと答える魚津に、小坂は「俘囚になったか」と言い放った。小坂はすぐにその言葉を取り消し謝るも、すでに二人の間に

は美那子をめぐる激しいライバル関係が成立している。現に、小坂ときっぱり別れたいという美那子の気持ちを聞いていた魚津でも、小坂が美那子から夫婦生活について聞かされていたと知り、彼女からもらったという赤いライターを見て、嫉妬心を覚えている。

しかし魚津は、美那子を想うあまりに小坂を敵対視している、というわけではない。美那子につれなくされてもなお恋慕の情を断ち切れずに涙する友への思いやりと優しさは持ち続けているのだ。そんなときは、友人の小坂をこれほど苦しめる美那子に冷淡である。小坂との肉体関係を、魔が差した、という美那子の返答に納得できないまま暇を告げる魚津は、美那子に引き留められると、こう言う。「いや、失礼いたしましょう。小坂のやつ電車にも乗らないで歩いていると思うんです。小坂が歩いているのに、ここでお茶を飲んでいては、あいつが可哀そうですからね」(二章)。魚津は美那子に惹かれながらも、小坂に友としての愛情も抱き続けている。まさに二人に対する感情の板挟みのなかで魚津は揺れ動いている。

苦しむ小坂に、年末に控えている登山へと話題を転じ、山に行けば女のことなんて吹っとぶ、と水を向ける魚津だが、小坂は美那子こそが山へ連れて行きたいと思う女だと答える。山に登っている時でさえ小坂は美那子への想いに付きまとわれているのだ。この話を聞いた魚津は、これまでに山で女のことを考えたことなどなかったが、今となっては自分も美那子を山へ連れて行きたいと、ふと夢想した。そして魚津は、いよいよ三角関係がのっぴきならぬものになりつつあることを意識せざるを得なくなった。

自分の友達が美那子に対する執着を断ち切ろうとして苦しんでいる時、人もあろうに、その同じ相手を自分もまた山へ連れて行く相手として選ぼうとしていたことは、友に対する不信のうちでこれほど大きいものはないわけだった。魚津は自分で、そんな自分が嫌だった。(二章)

ただし、このとき魚津が空想したのは、小坂の夢のような、美那子を山に登らせるという実現不可能な夢ではなかった。

魚津の場合は必ずしも夢とは言いきれなかった。どこかで現実と結びついていた。樹林地帯へ彼女を立たせることなら、それは企ててできないことではなかった。それだけに魚津はその自分の想像にやりきれないものを感じた。小坂に対しても、当の美那子に対しても、その魚津の空想には不逞な、許すべからざるものがあった。(二章・傍点引用者)

魚津の空想は、小坂と違って現実的なものであり、実現しようと思えばできるものである。しかしながら、それだけ一層そこに、「不逞な、許すべからざるものがあ」るのは、その空想には、美那子の魚津への恋情というリアリティが裏打ちされているからである。小坂の空想が実現不可能であるのは、彼の美那子への想いが全くの一方通行で、美那子から返ってくる情がないという事実を反映している。一方、魚津は美那子も自分を慕っているらしい手応えをひそかに感じている。だから魚津は、美那子を樹林地帯に連れてくること

は、やろうと思えば実現可能だと自分でも認識している。そして美那子にもその気があるという意味において、実現可能であるからこそ、この想像は、小坂に対する裏切りとなる。また、美那子の自分への想いに気付いているからこその想像であるから、美那子に対しても、彼女の心に踏み入りすぎて礼を失していることになるのである。

第三章　もう一つのホモソーシャル ― かおるの場合

小坂にはかおるという妹がいたが、彼女は魚津のことをひそかに慕っていた。前近代社会からの伝統によれば、小坂の妹が親友の魚津に嫁いで男同士の絆を強める役割をするのは、ホモソーシャルの王道である。恋愛結婚が一般的でない時代、男の友人同士の妹が兄の友に嫁ぐという例は枚挙に暇がないほどありふれたことであった。[12] 小坂が死んでしまったとはいえ、男性間の絆は強固で深いから、死後もその精神性が生き延びてホモソーシャルの絆を維持する、というのもよくあることだ。現に、小坂の事故が起きたのち、山小屋で捜索隊を待っている魚津は小坂の存在を認めていた。「眼は小坂の顔を見詰めていたし、耳は小坂の声を聞いていた。そして口は絶えず小坂としゃべりづめにしゃべっていた」（三章）。魚津にとって小坂は亡くなってはおらず、今なお心の中で生きているのである。その意味で、かおるが、小坂と魚津の絆を強める連結環として機能するこの関係性も、ホモソーシャル的三角関係の一種と言える。しかしながら、美那子という存在がある以上、小坂と魚津、そしてかおるの三角関係と見えるものは、じつは、魚津と美那子、そして小坂の代理としてのかおる、という二章で検討した三角関係の変種にすぎない。以下でそのからくりを説明しよう。

お互いを意識してほのかな恋慕の情を抱き合う魚津と美那子の愛情が深まるのは、小坂の死やザイルの実験をめぐる用事と称して、二人が重ねる逢瀬を通してである。ところがこの二人の逢瀬の後、常にかおるが二人のうちのどちらかの前に現れる。たとえば、八代教之助が主導した実験で、ザイルが切れなかったという結果が知らされたのち、心配した美那子が魚津を会社に訪れ、二人はかなり踏み込んだ話をする。美那子は小坂が自分への失恋から自殺したのではないかと疑っていたのである。その時、魚津は彼女の邪推を跳ねのけて小坂を擁護するのだが、こう言う。

「小坂という人間は、失礼ですが、貴女より僕の方がよく知ってるようですね。僕は小坂に対して愛情を持ってましたから、あの男のことは隅から隅まで判ってるつもりです」（六章）

この言葉には、小坂を疎んじていた美那子に対する非難が含まれている。小坂のことを、魚津と美那子のどちらが本当に愛していたかを競い合っているかのようだ。小坂が自分への想いから山で自殺したのではないかという疑念そのものが、山男の小坂に対する冒涜なのである。それは山男同士である彼ら二人が共有するものであり、美那子はその埒の外にいるためあずかり知らない感情である。しかも魚津はそんな美那子をホモソーシャルな絆からは排除している。

その後、魚津は退社して自宅アパートに帰るが、そこにかおるが部屋に来ていた。魚津は部屋の中にいる人物を美那子だと思い、「八代さんですか」と声をかけた。

小坂の遺体が発見されたのち、魚津は小坂の遺体に付いていたザイルの切口の実験を八代にやってもらいたいと依頼するが、断られる。それに関して心配した美那子が会社に魚津を訪れるも、彼は不在だった。後日会ったときに、魚津は彼女に自分の愛情を打ち明けて、小坂に申し訳ないからもう会わないと告げる。この時美那子も魚津への愛情を確認する。「自分はもう長いこと魚津という人間に特殊な気持を持っていたが、それがいま初めて愛情という形で、自分の胸に落着いたような気持であった」（九章）。二人は相思相愛を確認したのと同時に、別れを決意したのだった。この重大な逢瀬の後、一人で歩く美那子の前に突然かおるが現れる。

> 美那子は新橋駅へ曲がろうとした時、背後から声を掛けられた。振り返ってみると、思いがけず、そこには小坂かおるが立っていた。（九章）

かおるはかおるで、ザイルの切口の実験を八代にやってもらえないかと美那子に聞いてきたのである。

このように、魚津と美那子の関係が重大な局面を迎える度に、かおるが現れる。それはあたかも、死んだ小坂に遣わされたかおるが、魚津と美那子の関係が進展するのを妨害しているかのようなのである。このときのかおるは小坂の分身、あるいは小坂の幽霊のようだ。このようにして、例のあの三角関係は、小坂の死後も、代理のかおるを通して成立しているのである。

男としても通用する名を与えられたかおるは、敏捷そうなほっそりした姿からしても少年のような印象を与える。モデルである芳田美枝子を踏襲しているかおるは、スキーの名手でもある。山に小坂を捜索に行くという魚津に自分も同行したいと告げる。

> 「わたしもついて行っていいでしょう？」
> 「もちろん結構ですが、今はまだ雪が深いから無理ですよ」
> 「大丈夫ですわ、――登山家じゃありませんけど、スキーは魚津さんよりうまいかも知れません」（六章）

残雪の中から発見された小坂の遺体は樅の木の焚火で荘厳に焼かれ、荼毘に付された。かおるは山男たちによる厳粛な葬儀に加わることを許された、紅一点の参列者であった。彼女は、山男たちのホモソーシャリティに参入することを許された唯一の女性なのである。兄の遺体を焼く炎を見て感動した彼女は、魚津に自分と結婚してほしいと告げる。女性からの逆プロポーズ、これも当時の女性性を逸脱する、男のような振る舞いである。美那子に愛情を告白するのと同時に別れを告げた魚津は、かおるとの結婚を決意する。この決断をするときの魚津は以下のように描写される。冷静になって、「月光でも頭脳の一部へ射し込んで来たように」（九章）考えが冴え冴えとしてきた。「自分はこの娘と、小坂乙彦の妹と結婚すべきだと」思った。このときの彼の思考に浮かぶかおるは、名前を持たない、ただ

の「娘」でしかない。つまり魚津は、「小坂かおる」ではなく、「小坂乙彦の妹」との結婚を決意した。小坂の妹だからという理由で、彼女と結婚するのである。この結婚は、魚津、小坂、かおるをめぐる伝統社会のホモソーシャル関係の上に成立する。

結婚を決意した彼は、突如こう言う。「山へ行きませんか、二人で」。こう誘ったときの魚津にとって、かおるは小坂乙彦となっていたはずだ。美那子にならば、到底こんな誘いはできない。小坂の分身のかおるだからこそ、かつて小坂を誘ったのと同じような気持ちで気軽に山へ誘ったのである。

穂高の難所に挑戦し、「徳沢小屋へ降りて、かおるに顔を合わせる時の自分は、現在の自分とは全く違った人間になっているはずであった。なぜなら自分は、人間を変えるために、八代美那子への執着を払い落すために」氷壁を登るのである。

しかしこの登山で魚津は遭難死する。それまで歩いて来た道を引き返すことは、危険地帯から身を引くことであるはずなのに、「戻って行くことは、なぜか美那子のもとへ返って行くことを意味しているような気がした」。そして前方にはかおるがいると感じ、前へ進む。

> 前へ進むべきだ。進まなければならぬと魚津は思った。自分はかおるのところへ行かなければならぬ。美那子の幻影を払いすてるために、自分はこの困難な危険の多い山行を思い立ったのではないか。（十章）

かおるが待つ場所に向かって進んだ挙句、落石に遭って動けなくなった。かおるに向かって進む途中で、魚津は息絶えたのである。ここで明らかに、かおるは魚津の死を誘っている。死んだ小坂の代理として魚津を美那子から引き離し、死へ導いている死神のような存在となっている。

かおるは、女性ながらも小坂の分身として、兄の属する山男たちのホモソーシャルな社会の一員である。他方、美那子はその社会の外部にいる、近代の女性の象徴である。彼女の夫は、当時始動し始めた日本の資本主義的産業社会の中枢に位置し、ザイルの再現実験に従事した科学者であり、近代資本主義経済とその基礎を支えた科学的合理主義の権化である。本来伝統的でホモソーシャルな山男の社会の住人である魚津にとって、美那子は「他者」であり、欲望の対象であった。しかも彼女は、魚津に親友の小坂を裏切らせようとする。男二人の関係を不安定で剣呑なものにする美那子は、素朴な山男たちによって維持される伝統的なホモソーシャル共同体の破壊者であり敵である。

そう考えると、美那子と魚津を奪い合ったかおるは、伝統的なホモソーシャル共同体の守護神であったことが確認できる。と同時に彼女は魚津を死の世界へ誘う死神のような存在でもあった。現に魚津の死さえ、彼女にはそれほど応えてはいない。自分に向かって来る途中で死んだ魚津について、「いまも自分の方へ向って歩いて来つつあるという思い」（十一章）を消すことができない彼女は、魚津の死後、充実感で満たされていた。ようやく魚津を美那子から完全に奪い独り占めできたのだ。魚津が生きている限り、彼の美那子への

想いを払拭することはできない。魚津が死ぬことで、ようやく小坂兄妹は魚津を美那子から永遠に切り離し、自分たちだけのものにすることができたのである。

最後に彼女は、「美しいフェースを探し、そこへ小さなケルンを作って、その上に魚津恭太と小坂乙彦の二本のピッケルを差し込むために」穂高へもう一度登ろうと決意する。それは、兄たちが帰属したホモソーシャル共同体の墓標を打ち立てる行為に他ならない。美那子という近代の女を排除した彼女が純化し神聖化するホモソーシャル共同体は、かおるによって聖化されるのだ。かおるは生涯結婚をせず、彼女の純潔を神殿に捧げた巫女となるだろう。

終わりに ― ホモソーシャルの発動と完遂

かおるを小坂の分身であり、魚津の死をかおるに導かれたものとして考察してきたが、最後に、小坂と魚津との関係性から、魚津の死を考察してみたい。

一章で、小坂が美那子をどうしても諦めることができないと、魚津に告白する場面について触れた。その時、美那子を冬山登山に連れて行くという実現不可能な小坂の夢と、実現可能な魚津の夢の対比が際立たされていた。小坂は山へ行ってさえ美那子を忘れることはないのだと告白する。

実際には山へ女は連れて行けない。行けようはずはない。夢さ。空想だよ。ただ山へ登るやつがそうした空想をする時、そこへ現れてくる女はその山登りにとっては普通の関係じゃないと思うな。その時のその女に対する愛情は純粋だよ。（二章）

それに対して魚津の空想は実現可能であることが強調される。「魚津の場合は必ずしも夢とは言いきれなかった。どこかで現実と結びついていた。樹林地帯へ彼女を立たせることなら、それは企ててできないことではなかった」。先に、この魚津の空想は、美那子の愛が裏打ちされているからこそ実現可能として想定されていることを指摘した。この「実現可能性」を踏み込んで読むと、魚津はなろうと思えば美那子と一緒になれなくはなかった、という結婚の可能性もが喚起されている。美那子は魚津を愛しているのだから、二人が本気で望めば、彼女は夫と離婚して魚津と再婚することも可能であったはずなのだ。それなのに、魚津は美那子を諦めて、かおるとの結婚を選び、その結果死ぬことになった。最期を迎えた危険地帯で、美那子の方へ引き返していれば、彼は死を免れていたのではないか。あの場面において、美那子は生の、かおるは死の象徴であったことは明らかだ。なぜ魚津は美那子を選ばなかったのだろうか。そして彼女とともに生きることを放棄したのであろうか。

魚津をして、美那子を選ばせなかったものとは、逆に言えば、かおるを選ばせたもののことである。先に、かおるを選んだのは小坂乙彦の妹であるからだと指摘した。つまり、魚津が美那子を選ばなかったのは、親友である小坂のためだったのである。美那子を選び、生の方に立ち戻れば、小坂を裏切ることになる。大切な親友とのホモソーシャルな絆を自ら汚すことになるのである。

魚津は、美那子にもう会うことはないと告げた際、その理由を「二人の人間のために」（九章）いけないことだからだと言った。「一人は生きている人間で、一人は死んだ人間です。もちろん一人は八代さんで、一人は小坂ですよ」。

さらにこう続ける。

「僕は小坂が苦しんだ気持ちがいまはよく判りますよ。よく判るんです。あいつの言葉の一つ一つが、いまの僕にはこたえます。小坂は貴女に冬山の氷の壁を見せたいと言いました。実際に彼は心からそう思ったんですよ。僕もいま冬山の氷の壁を見せたい人があるとすれば、失礼な言い種ですが、貴女だと思うんです」

ここで注目すべきは、最初、魚津は樹林地帯へ美那子を連れてゆくという実現可能な夢を抱いており、小坂との相違を自覚していた。それなのに今は、小坂の夢と同じものを抱き、小坂に同化しているのである。かつては小坂を批判し、美那子を諦めるべきだと論していたのに、魚津は変化している。小坂の死を経て小坂と同じ気持ちになっているのである。これはつまり、小坂の魂を内面化し、小坂の精神性を取り込み、一身同体になったということである。ここにおいて、魚津と小坂のホモソーシャル性が完遂した。魚津が美那子に惹かれたのは、小坂ゆえであったし、美那子を諦めるのも小坂のためであった。魚津は、親友とのホモソーシャルの絆に殉じたのである。

先に確認したように、モデルとなった松濤明と有元克己の北鎌尾根遭難事件に女性をめぐる恋愛事情が絡んでいたわけではなかった。松濤と芳田美枝子の間にほのかな恋情が通い合っていたのかもしれないが、有元を巻き込んではいなかった。作者は、意図的にこの作品をホモソーシャルな三角関係として設定し、美貌の人妻に翻弄され揺らぐ男同士の友情の行方をテーマとする作品に仕立て上げた。

作者はなぜ、この作品にこれほど典型的にホモソーシャルの要素を持ち込んだのであろうか。そもそも登山家の世界は、ザイル・パートナーのように男同士の関係性が強く、なおかつ難易度の高い冬山や標高の高い山への挑戦では、肉体的な条件から女性が排除されがちである。そして常に死と隣り合わせにある危険度の高い登山はストイックで高い精神力が要求される。近代のホモソーシャルが典型的には戦場における兵士間に認められるように、危険でストイックな登山の世界はホモソーシャリティに極めて適合的である。作品が発表されたのが一九五六年、モデルとなる遭難事件が起こったのは一九四九年と、第二次世界大戦の終戦からさほど時間が経っていない時期にあたる。作品に登場する山に人生の夢を捧げる男たちは、戦場で散った兵士たちの残像を帯びているかもしれない。だが、日本社会は一九五三年に休戦した朝鮮戦争特需によって、戦後高度成長の緒に付いたところであった。戦争の記憶が急速に過去のものになりつつあり、資本主義経済のもたらす豊かさの萌芽が感じられ始める、戦後から高度成長時代への過渡期であった。急速に過去のものとなりつつある時代へのノスタルジーを込めて、井上は、この過

渡期に、兵士たちの次の時代に生きる岳人の物語を紡いだ。彼らは、戦場から山へと、戦う場を変えただけの、遅れてきた兵士たちのように見える時さえある。

一九五六年当時、高度経済成長に突入する直前の日本で、忘れ去られつつある伝統的なホモソーシャル共同体は、かおるという巫女によって永遠に美しいままの姿で穂高に埋葬された。他者たる女たちが容易には近づけない穂高の峻厳なる山中に。その後の産業社会を経てなお今も、もちろんホモソーシャルは形を変えて生き延びている。『氷壁』という作品は、作者、井上靖が、日本におけるホモソーシャル共同体の変遷の、ある一瞬を捉え表現した作品と言えるかもしれない。それは井上自身が帰属していた、戦場に散った兵士たちのホモソーシャル共同体を支えた一つの時代を画するものであったろう。それ以降、彼は、そして彼らは、「他者」である女と本気で向き合わねばならなくなった。険しい山中に潜む「美しいフェース」は、戦士でもあった過去の男たちの絆の墓標である。さすれば、この作品は戦後日本の高度経済成長の到来とともに消え行くホモソーシャル共同体の挽歌として響き渡るのである。

――注

(1) ナイロンザイル事件については以下を参照。石岡繁雄・相田武男著『氷壁・ナイロンザイル事件の真実――石岡繁雄が語る』新装版　あるむ、二〇〇九年。

(2) 同前、一四四頁。

(3) 平塚晶人『ふたりのアキラ』ヤマケイ文庫、山と渓谷社、二〇一四年、一七頁。松濤と有元の遭難事件については同書および、以下を参照。松濤明『新編　風説のビヴァーク』ヤマケイ文庫、山と渓谷社、二〇一〇年。

(4) 松濤明、前掲書三三三頁。

(5) 同前　三三六頁。

(6) 円谷幸吉（一九四〇～一九六八）は陸上自衛官にして、長距離走・マラソン選手。東京五輪で三位となり、次のメキシコ五輪での金メダル獲得を目指していたが、不遇の重なる中、持病の腰痛が悪化するなどして追いつめられ、五輪を前に自殺。この時遺した遺書は哀切な美しさで知られる。

(7) 井上靖『氷壁』（新潮文庫、一九六三年初版、二〇一八年版）五八五頁。このちの本書からの引用は章数の表記に留める。

(8) 平塚晶人、前掲書一七ページ。

(9) ホモソーシャルについては以下を参照。イヴ・コゾフスキー・セジウィック『男同士の絆――イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀沢美由紀訳、名古屋大学出版会、二〇〇一年、三三頁。

(10) ルネ・ジラール『世の初めから隠されていること』小池健男訳、法政大学出版会、一九八四年、第三篇、第一章。

(11) 夏目漱石『門』においても、宗助と御米の恋愛は、「大風は突然不用意の二人を吹き倒した」（十五）としか表現されていない。彼らが恋に落ちたのは、自然現象である風に倒されたからであると言わんばかりであり、内面的心理への言及はない。

(12) これのもっとも一般的な例は、フォークグループ、かぐや姫の「妹」である。また、夏目漱石の『それから』において、三千代は、主人公代助の親友菅沼の妹であった。